

# ジャン＝バティスト・セーとジュネーヴ Jean-Baptiste Say and Geneva

喜多見 洋  
KITAMI Hiroshi

## I. はじめに

ジャン＝バティスト・セーは 1767 年 1 月 5 日リヨンに生まれている。『経済学概論』を著し、コレージュ・ド・フランス教授となった彼が、19 世紀前半のフランスを代表する経済学者であるということは、多くの人が認めるところである。しかしその一方、これまであまり注目されていないが、セーには、いわゆる典型的「フランス」と異質な要素が見られることも否定し難い事実である。例えばセーは、リヨンに生まれながら、洗礼はジュネーヴで受けており<sup>1</sup>、同時代のジュネーヴ人シスモンディ<sup>2</sup>やデュモン<sup>3</sup>に対し、その書簡の中で *concitoyen* と書いている<sup>4</sup>。本稿ではこのような彼とジュネーヴとのつながりに注目したい。そもそも今日、フランス語圏スイスの中心都市となっているジュネーヴは歴史的に見て特殊な町である。カルヴァン以来、この町は「プロテスタントのローマ」として新教布教の中心都市となった。そしてナントの勅令が廃止されて以後の状況が示すようにヨーロッパ各地、とりわけフランスからの多くのユグノーの亡命先、あるいは一時滞在地点としてきわめて重要な役割を果たしてきた。また政治的にもこの町は、複雑な変遷をとげている。セーの同時代だけを見ても、中世以来の都市国家である「ジュネーヴ共和国」が、フランスによる併合<sup>5</sup>の時代を経て、最終的にスイスの 22 番目のカントンとなっている。そしてこうしたジュネーヴという都市の特殊性は、セーとも無関係ではない。セー自身、フランス社会における少数派であったユグノーの家系に属しており、後で触れるようにジュネーヴが 18 世紀後半に経験したいわゆる「ジュネーヴの革命」も、彼の生涯に少なからぬ影響を及ぼしているのである。だがそれでは、彼とジュネーヴのつながりは、彼の人生、知的活動、そしてとりわけ彼の経済思想の展開にどのように関わったのだろうか。

こうした点を明らかにするため本稿では、従来の文献、資料に加え、セーの娘 Octavie の嫁ぎ先である Raoul-Duval 家から 1984 年に国立図書館 (BNF) へ寄贈されたセーのマニスクリプト、ジュネーヴ大学公共図書館 (BPU) やジュネーヴのアルシーヴ・デタに残されている資料等も利用しながら、まずセーの家系について検討を加える。そしてこれをもとにセーの知的活動とジュネーヴの関連、さらに彼の経済思想の展開とジュネーヴの関連を論じてみたい。

<sup>1</sup> これは、彼の三人の弟 Denis-André, Jean-Honoré, Louis Auguste も同様である。彼らはいずれも、リヨンに生まれながらジュネーヴで洗礼を受けている。Cf. *Ville Répertoire Baptêmes 1764-1775*.

<sup>2</sup> Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi (1773-1842).

<sup>3</sup> Pierre-Etienne-Louis Dumont (1759-1829).

<sup>4</sup> デュモンもセーに対し *concitoyen* と書いた書簡を残している。Cf. BNF, Fonds J.-B. SAY 5. Lettres reçues.

<sup>5</sup> 1798 年のフランスによる併合の結果、ジュネーヴは 1814 年までフランスの一都市、レマン県の県庁所在地となる。

## II. セーの家系

これまでセーの家系については、1971年に出版されたJ. Valynseeleの『セー家の人々とその姻戚関係』<sup>6</sup>が、最も包括的で詳しい。但しこの本も、ジュネーヴに関する記述には、不満が残る。また最近のA. Tiranによる「J.-B. セー (1767-1832) 伝記的試論」<sup>7</sup>も有益であるが、ジュネーヴとセーのつながりを知るには十分でない。そこで筆者がジュネーヴで収集した資料等も加え、特にジュネーヴとの関係に注目しながら、セーの家系におけるジュネーヴ的要素をもう一度整理してみることにする。

まずセーの父方から見てみよう。J.-B. セーの父、Jean-Etienne Sayがジュネーヴ出身であるということはよく知られているが、最初にジュネーヴにやって来たのはJ.-B. セーの曾祖父Louis Saixである。1649年ニームに生まれた彼は、初めラシャ商人をしていたが、1687年にアムステルダムへ亡命し、ブルジョワとして受け入れられる、そして1694年にはジュネーヴに亡命する。彼はここでラングドックのCaylar出身のMarie Farjon<sup>8</sup>と結婚し、1705年に没している。彼のアムステルダムへの亡命にしろ、ジュネーヴへの亡命にしろ、1685年がナントの勅令の廃止された年であることを考えれば、宗教上の理由からであることは容易に推測できるであろう。そしてセーの家系へのこうした宗教的影響は、Louisの子供の代、すなわちJ.-B. セーの祖父の代にも見られる。Louisには二人の息子がおり、一人はFrançois-Samuel Say、もう一人はJ.-B. セーの祖父Jean Sayであるが、このFrançois-Samuelがプロテスタントの牧師となっているのである。彼は、1698年ジュネーヴに生まれ、はじめジュネーヴのSaint-Evangileの牧師になった後でロンドンへ行き、Willerstreet教会で牧師をしている。一方Jeanの方は、1699年ジュネーヴに生まれ、ラシャ商人となる。1730年にジュネーヴのブルジョワとして受け入れられ、1734年10月24日Jeanne Mussardと結婚している<sup>9</sup>。J.-B. セーの父Jean-Etienne Sayは、1739年この両親の間に生まれた。ジュネーヴの『市洗礼目録』<sup>10</sup>には、Jean-Etienneの他に、AndrienneとMarie Françoiseという二人の姉が記載されており、このうちMarie Françoiseについては、特に情報はないが、Andrienneについては、後述するようにDaniel Du Voisinと結婚しセーの家系に少なからぬ影響を与えたことがわかっている<sup>11</sup>。こうしてみるとセーの父方の家系は、ジュネーヴとつながりが深いことがわかるであろう。

しかしセーとジュネーヴのつながりは、父方だけではない。セーの母方もジュネーヴと密接に結びついていた。彼の母方の祖母Elisabeth Castanetは、ジュネーヴのRath家からリヨンに嫁いでおり、BNFのFonds Sayに残されているマニュスクリプトには、彼女の父がGuillaume

<sup>6</sup> J. Valynseele, *Les Say et leurs alliances*, Paris, 1971.

<sup>7</sup> A. Tiran, "Jean-Baptiste Say, Manuscrits sur la monnaie, la banque et la finance (1767-1832)", *Cahiers Monnaie et financement*, 1995, pp. 46-121.

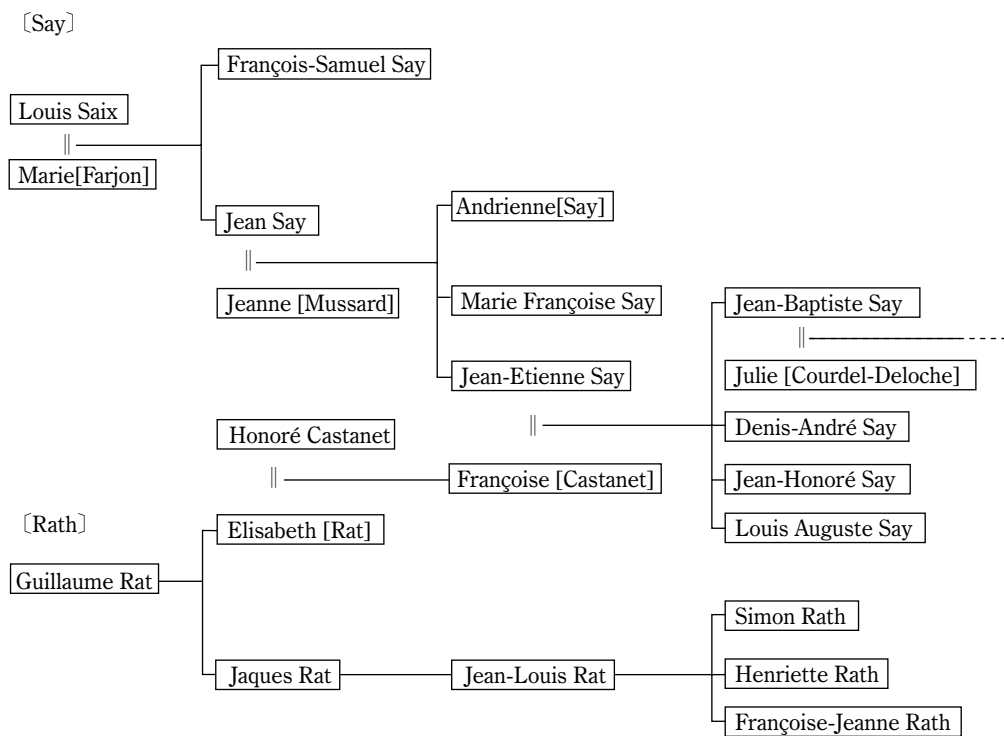
<sup>8</sup> 彼女は、Paul FarjonとAnneの娘で、1739年ジュネーヴにおいて78歳で死亡している。

<sup>9</sup> 彼女は、ジュネーヴの市民Antoine MussardとSaraの娘で、1708年3月26日リヨンに生まれ、1752年5月22日ジュネーヴのプランパレで没したとある。

<sup>10</sup> Cf. *Ville Répertoire Baptêmes 1726-1737*, p. 315.

<sup>11</sup> BNFのマニュスクリプトには、彼女は1736年に生まれ1756年Daniel Du Voisinと結婚するが、子供二人は夭逝したという記述がある。彼女が、自分の甥たちの世話を色々とやいたのは、こうした事情が影響しているのかもしれない。Cf. BNF, Fonds J.-B. SAY 6. Documents le concernant.

図 セーの家系



Rath<sup>12</sup>であると書かれている。この Guillaume Rath について、現時点ではフランス側にこれ以上の特に注目すべき情報はない。けれどもジュネーヴ側の資料によれば Guillaume は、今日ジュネーヴの代表的美術館の一つになっている Musée Rath の創設に尽力した Simon Rath, Henriette Rath, Françoise-Jeanne Rath 三兄妹の曾祖父でもあった<sup>13</sup>。従って、J.-B. セーと Rath 兄妹は、又従兄弟ということになる<sup>14</sup>。ジュネーヴの BPU には、セーの長男 Horace-Emile Say が 1840 年代から 50 年代、Henriette Rath に一族の近況を知らせた 20 通ほどの書簡が残されているが、その中でオーラスが Henriette に対し “Ma chère et bonne Cousine” とか “Ma chère et excellent Cousine” といった表現をしているのはこのためである<sup>15</sup>。

<sup>12</sup> Cf. BNF, Fonds J.-B. SAY 6. Documents le concernant. ジュネーヴの『市洗礼目録』には Guillaume の名前は、Rat と記載されている。Cf. *Ville Répertoire Baptêmes 1701-1713*, p. 285.

<sup>13</sup> Cf. *Ville Répertoire Baptêmes 1701-1713, 1726-1737*.

<sup>14</sup> この点は、デュモンおよびシスモンディとの関係で大きな意味をもってくる。Rath 兄妹のうち、兄 Simon は、デュモンの甥 Jacob-David Duval と極めて親しかったし、妹 Henriette は、デュモンならびにシスモンディと交流があり、彼等がセーと交わした書簡にも名前が出ている。

<sup>15</sup> BPU, Ms. fr. 3800 Papier Duval Correspondance adressée à Henriette Rath.

### III. セーとジュネーヴ

#### 1. セーの知的活動とジュネーヴ

セーの家系とジュネーヴのつながりは、以上のように父方、母方とも従来考えられていたより密接である。だがセーの時代のジュネーヴは、けっして社会的、政治的に安定した時期ではない。当時のジュネーヴは、いわゆる「ジュネーヴの革命」の時期にあっており、この町の硬直化した寡頭政治をめぐる激しい対立が生じ、既存の体制を守ろうとする守旧派 *Négatifs* と、改革派 *Représentants* の間で長い闘争が繰り広げられていた。特に 1781 年、*Représentants* は、参政権を持たず社会的に不利な立場におかれていた人々と協力して代議制共和体制を築くことに成功するが、翌 1782 年ベルンとフランスが軍事介入して旧秩序を回復する。*Représentants* の指導者達はジュネーヴを追放されてしまい、このうち若干の者達はパリに亡命する。こうしたジュネーヴをめぐる動きがセーにも重要な意味を持つのである。セーが直接ジュネーヴで行なった知的活動はあまり知られていないが、知的活動におけるジュネーヴ人との関わりということであれば、フランス革命期に遡ることができる。すなわちまずクラヴィエールとの関係が挙げられる。セーに『国富論』を貸し与えるなど、この時期にクラヴィエールがセーにとって重要な役割を果たしたことは、すでによく知られているとおりである<sup>16</sup>。彼はフランスの大蔵大臣になったが、もともとジュネーヴ人であり、亡命した *Représentants* の指導者の一人でもあった。またベンサム の諸著作を仏訳し、ベンサム思想の普及者として名高い思想家である E. デュモンとの関係も指摘しておかねばならない。彼もやはり *Représentants* の一員で、革命期ミラボーの下で働いており 1829 年に亡くなるまでセーと親交があった<sup>17</sup>。セーは晩年、彼に宛てた書簡で次のように述べている。

「私がミラボーの購読者を受け付けているにすぎなかった時に、あなたがミラボーに助言を与えていたのを、私は覚えています ……」<sup>18</sup>

これは、セーが、フランス革命期にデュモンと一緒にミラボーのもとで働いていた頃のことを回想した記述である。当時のミラボーの周囲には、上のデュモン、クラヴィエール<sup>19</sup>の他にも J.-A. デュロブレ<sup>20</sup>、E.-S. レイバ<sup>21</sup>といった有能なジュネーヴ人がおり、ミラボーの政治活動

<sup>16</sup> Cf. *Ceuvres diverses de Jean-Baptiste Say*, Paris, Guillaumin, 1848, p. iv.

<sup>17</sup> セーとデュモンの知的関係については、次の拙稿を参照されたい。Cf. 拙稿 “Quatre lettres de Jean-Baptiste Say adressées à Etienne Dumont”, 『大阪産業大学経済論集』第 1 巻, 第 2 号, 2000 年 [2000a]; “Les lettres inédites de Jean-Baptiste Say adressées à Etienne Dumont, datées des années 1820”, 同上, 第 1 巻, 第 3 号, 2000 年 [2000b].

<sup>18</sup> 拙稿, [2000b], p. 71.

<sup>19</sup> Etienne Clavière (1735–1793).

<sup>20</sup> Jacques-Antoine Du Roveray (1747–1814).

<sup>21</sup> Etienne-Salomon Reybaz (1737–1804).

<sup>22</sup> J. Bénétruy, *L'Atelier de Mirabeau. Quatre Proscrits Genevois dans la Tourmente Revolutionnaire*, Jullien, Genève, 1962. この著作には J.-B. セーの名前は出てこない。

を支え、『クーリエ・ド・プロヴァンス』発行の主力となっていた。彼らはいずれも 1781-82 年の闘争がもとでジュネーヴを出た *Représentants* のメンバーである。彼らによって構成されるいわゆる「ミラボーのアトリエ」については J. Bénétruy による同名の著書『ミラボーのアトリエ』<sup>22</sup> が詳しいが、当時まだ 22～3 才の青年セーも、このジュネーヴ人達とともに働いていたのである。セーが「ミラボーのアトリエ」で働くことができたのは、おそらくクラヴィエールのおかげであろう。だがクラヴィエールがなぜそれほど J.-B. セーに目をかけたのか。この点に関しては、これまではっきりしていなかった。けれどもジュネーヴに残されている人名事典には、「彼の父の同郷人であり、友人であるクラヴィエール」という記述がある。これによれば、セーの父 J.-E. セーとクラヴィエールが同郷の友人であったためクラヴィエールは J.-B. セーに色々と目をかけたと考えられる<sup>23</sup>。

ジュネーヴ人とセーのつながりはこれにとどまらない。本稿末の資料を参照していただきたい。これは、J.-B. セーの伯母 *Andrienne Du Voisin* が、ジュネーヴの学者 *Georges-Louis Le Sage* に宛てた書簡である<sup>24</sup>。彼女は、単なるセーの伯母ではない。『J.-B. セー著作集』にも「彼の父の姉で、しっかりした精神の女性で、その助言が彼にとって常に有益だった伯母」<sup>25</sup> とあり、セーがナポレオンと対立して公職を退き、*Auchy* で工場経営を開始する際にも、あらかじめ彼女をジュネーヴに訪ね助言を求めている。この書簡でも彼女は、セーの弟ジャン＝オノレ・セーの勉学の問題で助力しているようだが、それ以上に注目すべきは、彼女とジュネーヴの政治的、社会的状況との関係である。この中には「われわれの友人レイバ」という表現が出てくる。これは、上の E.-S. レイバのことであり、セーの伯母 *Du Voisin* 夫人が、ジュネーヴの革命において *Représentants* の一員であったレイバとかなり親しい関係にあったことを示している。またこの書簡には「わが故郷の不幸」という表現も見られる。これは、彼女が当時のジュネーヴの政治的社会的状況に批判的だったことを示している。革命期の若きセーが知的活動を開始したのは、このように彼の父や伯母と交友関係のあったジュネーヴ人達によって作り出された *Représentants* 的環境においてだったのである。そのうえセーとジュネーヴのつながりは、その後の人生にも様々な形で影響を及ぼしている。彼は出版、通信、等でもジュネーヴ人脈と関わっており、ジュネーヴの資料は、セーの知的活動におけるジュネーヴとのつながりを垣間見させてくれる<sup>26</sup>。そして次に見る経済学者としてのセーの活動もこうした彼の知的活動の一部と考えられるのである。

## 2. セーの経済思想とジュネーヴ

セーとジュネーヴのつながりが、彼の経済思想にどのように影響したか考える場合に、鍵となるのは、二人のジュネーヴ人、シスモンディおよびデュモンとの関係である。

まずシスモンディとの関係から見てみよう。セーとならんで、シスモンディが 19 世紀前半のフランス語圏で主要な経済学者であることは、間違いない。ところが従来は、一般的供給過剰

<sup>22</sup> この事典は、ジュネーヴのアルシーヴのアルシヴィスト L. Sordet によって編纂された手書きの人名事典であり、上の引用は、J.-B. セーの大伯父 *François-Samuel Say* の項目から行なっている。Cf. L. Sordet, *Dictionnaire des Familles Genevoises*, 1869.

<sup>24</sup> BPU, Ms. Suppl. 512. ( *Lettres adressées à Georges-Louis Le Sage* ) f. 275-76.

<sup>25</sup> *Œuvres diverses de J.-B. Say*, 1848, p.ix.

<sup>26</sup> BPU のデュモン・コレクションや BNF の *Fonds J.-B.SAY* のマニュスクリプトは、この点に関し有益である。

論争での二人の見解の相違ばかりが注目され、二人の交友関係は軽視されがちであった。しかし彼らの交友関係は、P. Roggi が紹介したセーの書簡<sup>27</sup>で見ると1803年まで遡ることができ、いくつかの興味深い事実を示している。次の引用は、セーのシスモンディ宛書簡(1803年7月13日付)からのものである。

「これは、私の『経済学概論』です。私があなとの人格と才能を重んじている証としてお受け取りいただければ幸いです。私は『商業の富』の著者ほどの見識ある賛同をいただければうれしく思います。私が貴著を受け取った時、拙著は、すでに印刷に渡されていました。さもないと私は貴著から、われわれが二人とも主張する諸原理の拠り所となるはずのいくつかの例を得たことでしょう。」<sup>28</sup>

セーはこの手紙を、当時出版された『概論』初版と一緒に、シスモンディに送っているわけだが、この時点で彼が『商業の富』を好意的に評価しており、すでに両者の知的交流がはじまっていることが分かる。そしてこのような二人の関係は、さらに次の文章によっても確認できる。

「あなたは、私が主要な全ての点でスミスに従ったことに気づくでしょう。しかし、もし私が誤っていないとすれば、私は、スミスが注意を払わなかった他の重要な点を明らかにしたのです。彼は、生産および消費という一大現象を完全に明らかにしたのでしょうか。彼は、どうして商業が実際には生産的だということを示したのでしょうか。彼は、実質の高価と相対的高価についての観念を解明したのでしょうか。この論者に精通しているあなたが、もし私が学問をいくらかでも進歩させたとお考えになるのであれば、私にお知らせ下さい。」<sup>29</sup>

スミスの見解の一部に疑問を呈しながら、シスモンディの意見を求めているセーの様子が想像できるであろう。イギリス古典派が、リカードの『経済学および課税の原理』(1817)やマルサスの『経済学原理』(1820)といった著作をつうじ彼らの経済学体系を具体的に提示するより10年以上も早く、すでに1803年の時点で、フランス語圏ではセーとシスモンディの間でこのようなやりとりが行なわれていたのである。両者の関係は、この時期からナポレオンの帝政期、王政復古期、セーの晩年と変化するが、彼等がずっと互いを意識し、評価していたことは確かである。セーがナポレオンと対立して公職を退き、工場経営に携わっていた1807年のシスモンディ宛書簡では、セーは自らの不遇を嘆きつつ、『概論』初版の改訂作業に触れ、すでに *Epitôme* の構想も示している<sup>30</sup>、1820年の『マルサス氏への手紙』と一緒に届けられたシスモンディ宛書簡では、セーは互いの意見の相違を認めながらもシスモンディを評価していることが分かる<sup>31</sup>。いずれもセーとシスモンディの関係を考える上で看過できないが、特に興味深いのは、セーの晩年である。この時期セーは、六分冊で順次出版しつつあった『実践経済学全講義』<sup>32</sup>と一緒に

<sup>27</sup> Piero Roggi, “Sette lettere di J. B. Say a J. C. L. Sismondi”, *Rivista di Politica Economica*, fasc. 7, 1972.

<sup>28</sup> *Ibid.*, p. 6.

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 6. Roggi 上掲稿では、この箇所に原資料と相違が見られる。本稿では原資料より引用した。

<sup>30</sup> *Ibid.*, pp. 10-11.

<sup>31</sup> セーは次のように述べている。「私があなたに保証できる全てのこと、それは私がおの科学の進歩だけを目ざしており、私が特にあなたに反対したのは、私があなたを、私が与しない意見の最も立派な代弁者とみなしたからだということです。」(*ibid.*, pp. 12-13.)

にシスモンディに書簡を送っている。そしてセーはその中で、シスモンディの見解へのいくつかの譲歩を明言している。

「私は、あなたがこの第二分冊をお読みくだされば、例えば「生産の限界について」と題された章におけるように、その中に、あなたの見解へのいくつかの譲歩を見い出すだろうと思います。」<sup>33</sup>

一般的供給過剰論争における彼の立場を考えれば、大変興味深い記述であるが、彼はさらに、同時代のイギリス経済学についても次のように述べている。

「他方、私が、恐らくあなたのご存知なことをお話しますと、それはリカードおよびマカロックの抽象が英国において完全に衰えたということです。」<sup>34</sup>

これは『全講』でセーが、リカード達について批判的に「実践的経済学よりも抽象的経済学に携わる論者達」<sup>35</sup>と表現しているのと符合しており、彼のリカード-マカロック系列の経済学についての批判的認識を示している<sup>36</sup>。このようにセーの経済思想の展開において、シスモンディの存在は、これまで考えられていた以上に意味を持っているのである<sup>37</sup>。

一方、セーの経済学は、デュモンとも深く関わっている。1.で示したようにセーとデュモンの出会いは、フランス革命期まで遡り、その後も1814年デュモンがジュネーヴに戻ってから亡くなるまで、彼等の交友関係が確認できる<sup>38</sup>。このデュモンの存在は、セーと功利主義の関係<sup>39</sup>について考える場合に重要であるが、ここではセーが晩年、彼の経済学に功利主義を組み入れようとしていたことに注目したい。われわれが『全講』から知ることができる晩年のセーの経済学には、『経済学概論』におけるセーの経済学と比べてだいぶ変化が見られるということ。この点は、欧米では、すでに共通認識となりつつあるが<sup>40</sup>、セーはデュモンに対し、1829年3月5日付けの書簡で、『全講』について次のような注目すべき提案を行っている。

<sup>32</sup> J.-B. Say, *Cours complet d'économie politique pratique* …… , 6vols., Paris, 1828-29. 本稿では『全講』からの引用は次に示す第2版によって行ない、巻数をI, IIと表記する。*Cours complet d'économie politique pratique*, …… , 2éd., , 2vols., Paris, 1840.

<sup>33</sup> P. Roggi, *op. cit.*, p. 18.

<sup>34</sup> *Ibid.*, pp. 18-19.

<sup>35</sup> *Cours*, II, p. 38.

<sup>36</sup> 彼はまた『全講』で、リカード-マカロック系列の経済学について、「……………以上が、私の形而上学的経済学と呼ぶものである。それは何の役にも立たない。なぜならそれは、実践 (*pratique*) において何の指針も提供しないのだから。」(*Cours*, II, p. 68.) とも述べている。

<sup>37</sup> シスモンディの1828年8月14日付けセー宛書簡は有益である。Cf. BNF, Fonds J.-B. SAY 5. *Lettres reçues*.

<sup>38</sup> そのうえデュモンはシスモンディとも大変親しかった。彼等はナポレオン体制崩壊後のジュネーヴで力を合わせ、今日のこの町の基礎を築くのに大きな貢献をしている。Cf. 拙稿「デュモン・コレクション」、『大阪産業大学論集』社会科学編、第113号、1999年。

<sup>39</sup> この点については下記の拙稿を参照されたい。拙稿「J.-B. セーと功利主義」、『大阪産業大学経済論集』、第2巻、第1号、2000年。

「効用 (utilité) について、私は、それを功利の原理の長い適用に他ならない私の『全講』最終第六分冊の一章にするため …………… これを擁護する準備をしていました。私は、この原理は何かということをも明瞭、簡潔に述べて、…………… ドイツ-スコラ学派に対して反撃したいのです。しかし私は、この主題について私が書いたもの、特に私が書くことができたものに満足しませんでした、そして私は、あなたの一論が私には、はるかに適しているということに気づきました。私の望みはあなたの論稿によって私の本をより充実させることですが、そこでは貴稿は、私の感謝の念にぴったりした表現をそえて、あなたの名前で出ます。」<sup>41</sup>

ここにいう功利の原理とは *principe de l'utilité* であり、セーが『全講』を功利の原理の長い適用に他ならない、と考えていること自体極めて重要である。だが、そのうえ注目すべきことに彼は、『全講』の最終分冊に、功利の原理について論じたデュモンの論文をつけることを提案している。そして受諾に関する細かな経緯は明らかでないが、セーは、提案を受諾したデュモンに対し、別の書簡で次のように述べているのである。

「わが尊敬すべき友よ、……………私は、あなたが書いたすばらしい論文によって私の『実践経済学全講義』をより充実させるというアイデアが実現できるとわかってうれしく思っています。……………効用は人間労働の目的です、そして私の著作全体の流れの中で効用を一定の量とみなした後、その性質と原理を知らせるのが賢明です。ところでこの分析において、ベンサムとあなたよりも信頼できる案内人は、見つかりませんでした。」<sup>42</sup>

ここにはデュモンの力を借り、自らの経済学に功利主義を組み入れようというセーの意図が明確に示されている。デュモンの急死により、セーの企ては結局実現できなかったが、少なくともデュモンのおかげでセーの計画が、『全講』において彼の経済学と功利主義を結びつける方向で具体化しつつあったことは間違いない。このようにシスモンディやデュモンといったジュネーヴ人の存在を通じ、ジュネーヴはセーの経済思想の展開にも微妙に関わっているのである。

#### IV. 結び —— ユグノー、功利主義、Genevois のネットワーク ——

セーとジュネーヴのつながりについて、フランス、スイスの新しい資料も利用しながら、それが彼の人生、知的活動、とりわけ彼の経済思想の展開にどのように関わったのかという側面から検討してみた。それにより明らかになったのは、セーとジュネーヴの家系的つながりが、父方、母方とも従来考えられていたより深く、強いこと、セーとジュネーヴのつながりが、セーの知的活動開始の重要なきっかけとなり、その後における彼の人生の転機に際しても、大きく影響しているということであった。そして経済思想との関連では、特にシスモンディおよびデュ

<sup>40</sup> Cf. 拙稿「J.-B. セイ『実践経済学全講義』の再評価」(時永淑編著『古典派経済学研究(IV)』、雄松堂、1987年、所収)。またセー自身、マルサス宛ての書簡で『全講』について、「私のこれまでのすべての著作よりもさらに完全な著作」と述べている。

<sup>41</sup> 拙稿 [2000b], pp. 71-72.

<sup>42</sup> 拙稿 [2000b], pp. 73-74.



モンとの知的交流が、生産の限界についてのセーの見解、功利主義とセーの経済学の接近等に影響を及ぼしているということであった。

だがこうしたセーとジュネーヴのつながりは、単にジュネーヴという町およびジュネーヴ人とのつながりにとどまるものではない。これはイギリス、フランスのユグノーのネットワークや功利主義ネットワークと重なり合っており、セーは、自らの知的活動において、これらのジュネーヴ人脈、ユグノーのネットワーク、功利主義ネットワークをうまく使いこなしているのである<sup>43</sup>。そしてこのような複合的ネットワークの存在を考慮すれば、本稿で見たようなセーとクラヴィエール、デュモン、シスモンディの関係、さらにはセーとベンサムとの親密な関係さえ不思議ではないはずである。新しい『J.-B. セー全集』刊行を契機として、現在、フランスだけでなく世界各地に散在するセーに関する文献、資料が、あらためて調査されつつある。本稿末に示した書簡もそうした資料の一つであり、日本でもセーに関する文献、資料をもう一度検討しなおす必要があるだろう<sup>44</sup>。

---

<sup>43</sup> E. Schoorl は、セーとユグノー、功利主義の関連について次のように述べている、「彼は確かにプロテスタント(ユグノー)の‘ネットワーク’の一員に属していた、そしてある程度それは、功利主義者の結びつきと部分的に重なっていると言える。」(E. Schoorl, “Bentham, Say and Continental Utilitarianism”, *The Bentham Newsletter*, 6, 1982, p. 17.)

<sup>44</sup> 一橋大学社会科学古典資料センターにも、J.-B. セーによる書き込みの残された『経済学および課税の原理』第三版(1821)が所蔵されている。

## Lettre de M<sup>me</sup>Du Voisin, née Say, adressée à Georges-Louis Le Sage

Hiroshi KITAMI

La lettre que je présente ici est celle que la tante de Jean-Baptiste Say<sup>1</sup>, M<sup>me</sup>Du Voisin,<sup>2</sup> a adressée à Georges-Louis Le Sage, un savant genevois.<sup>3</sup> Elle est conservée à la Bibliothèque publique et universitaire de Genève (BPU)<sup>4</sup>. J.-B. Say est l'un des principaux économistes français de la première moitié du XIX<sup>e</sup> siècle. Cependant il est à noter aussi que la famille Say est étroitement liée avec Genève : à l'origine, son grand-père et son père sont nés à Genève et y ont grandi. J. -B. Say lui-même, bien qu'il soit né à Lyon, a été baptisé à Genève et a utilisé l'expression de "concitoyen" dans quelques lettres adressées à E. Dumont et à J.-C.-L. S. de Sismondi<sup>5</sup>. Cette lettre montre plusieurs faits intéressants sur ses liens spéciaux avec Genève. D'abord ce qui est remarquable, c'est l'expression "notre ami Reybaz". Il s'agit d'Etienne-Salomon Reybaz<sup>6</sup> qui non seulement a fait partie des Représentants pendant la révolution genevoise mais a aussi été membre de *l'Atelier de Mirabeau* avec E. Clavière<sup>7</sup> et J.-B. Say pendant la Révolution française. Cela montre que M<sup>me</sup>Du Voisin, proche parente de J.-B. Say, est en relation avec Reybaz. Nous pouvons aussi trouver dans cette lettre l'expression "les malheurs de notre Patrie" qui montre que M<sup>me</sup>Du Voisin est critique au sujet de la situation politique et sociale de Genève de cette époque. De plus il est à noter qu'elle transmet une demande de son neveu qui souhaite consulter G.-L. Le Sage. Il s'agit peut-être de Jean-Honoré Say<sup>8</sup> et c'est la preuve de l'intimité des familles Du Voisin et Say avec George-Louis Le Sage.

En rendant publique cette lettre, j'ai essayé de reproduire le texte original en respectant l'orthographe de l'époque.

---

<sup>1</sup> Jean-Baptiste Say (1767-1832), professeur d'économie politique au Collège de France.

<sup>2</sup> Andrienne Du Voisin, sœur de Jean-Etienne Say qui est le père de J.-B. Say. Elle est "femme d'un esprit solide, dont les conseils lui avaient toujours été utiles" et est concernée par la fortune de la famille Say. Cf. *Ceuvres diverses de J.-B. Say*, précédées d'une notice historique sur la vie et les travaux de l'auteur. Avec des notes par F.-Ch. Comte, E. Daire et Horace Say, Paris, Guillaumin, 1848, p. ix.

<sup>3</sup> Georges-Louis Le Sage (1724-1803), physicien. Il est membre correspondant de l'Académie des sciences de Paris, associé étranger de la Société royale de Londres et de celle de Montpellier, membre de l'Institut de Bologne et des Académie de Padoue et de Sienne.

<sup>4</sup> BPU, Ms. Suppl. 512. (Lettres adressées à Georges-Louis Le Sage ) f. 275-76. Adressée 'A Monsieur / Monsieur Le Sage Correspondant / de l'Academie Royale des Sciences / de Paris à la Grand-Ruë / A Geneve'.

<sup>5</sup> Pierre-Etienne-Louis Dumont (1759-1829), penseur et publiciste genevois; Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi (1773-1842), économiste et historien genevois.

<sup>6</sup> Etienne-Salomon Reybaz (1737-1804).

<sup>7</sup> Etienne Clavière (1735-1793), financier et homme politique.

<sup>8</sup> Jean-Honoré Say (1771-1799), frère de J.-B. Say.

*Monsieur*

*Je saisis avec empressement l'occasion de me rapeler a votre souvenir en vous donnant avis que je vous ay expedie aujourd'hui par le Coche un paquet a votre adresse qui nous a été remis a Paris par notre ami Reybaz, qui paroît y être fixe et s'y plaire, il regrete ainsi que moi la privation de votre société, Say été bien sensible Monsieur a la bonté que vous avez eue de venir pour me voir lors de mon petit sejour a Geneve, et bien fachée d'avoir perdu une si agreable visite, les malheurs de notre Patrie ont dispersé bien des personnes faite pour vivre ensemble et c'est un grand plaisir pour moi d'en retrouver de tems en tems, il me paroît en general que tous sont content de leurs sort actuel.*

*Permetes Monsieur que je joigne icy une demande que vous fait mon neveux c'est celui que vous avez vu auprès de moi a Genève il n'a que 14 ans et grandes dispositions pour l'Etude et me temoignoit le plaisir qu'il auroit, d'être a portée de vous consulter quelques fois, m excuseres vous de la permission que je lui ay donnée de s'adresser a vous, Receves je vous prie les Compliments affectueuse de mon mari et l assurance de la Consideration distinguée avec laquelle je suis*

*Monsieur Votre tres humble  
et obeissante serv<sup>9</sup>  
DuVoisin née Say*

*Lausanne<sup>10</sup> ce 9 7<sup>bre</sup> 1786*

---

<sup>9</sup> serviteur

<sup>10</sup> sic.